

三小だより

11月号

ほめ方よりもしかり方の方が難しい

校長 藤本 賀津雄

しかって育てるよりもほめて育てた方がいいと思っている人は多いでしょう。しかし、いつもほめてばかりというわけにもいかず、時にはしかることも必要な場合があります。そんな時、どんなしかり方をすればいいのでしょうか。実はほめ方よりもしかり方の方が難しいのです。私たち教員もしかるときのほうが苦勞します。保護者の中にも、どんなふうに子どもにしかったらいいのか悩んでおられる方も多いと思います。

明治大学の諸富祥彦先生は、「しかるときに、してはいけないしかり方」を6つ挙げておられます。参考に短くまとめてご紹介します。

1. 大声を張り上げない

これは暴力と同じで、子どもに恐怖を味わわせているだけ。なぜしかられているか分からないまま、ビクビクしているだけ。

2. 感情的にならない

怒るのは感情、しかるのは教育。怒りの感情を込めると、自分は嫌われている、愛されていないと思ってしまう。

3. 理由を言わずにしからない

「あんたバカじゃないの」「何で怒られているかくらい自分で考えなさい」とどなるだけではだめ。なぜしかられているかきちんと説明しないと子どもには分からない。

4. 大勢の前でしからない

みんなの前でしかられてさらしものになったという経験は自尊心を傷つけてしまう。兄弟姉妹の前でしかられるというのも微妙な心の変化がある。できれば二人だけの時にしかるのがよい。

5. 時間が経ってからしからない

「さっきこんなことしたな。ダメじゃないか」と時間が経ってからしかっても、あまり効果はない。タイムリーにしかった方が効果的である。

6. 体罰の繰り返しはしない

体罰はよくない。それは憎しみとなり、親が困ることをわざとしたり、親を軽蔑したりするようになる。

何回言っても同じ失敗を繰り返してしまったり、注意が一回で素直に聞けなかったりすると、親はつい感情的になってしかることが多いかもしれません。しかし、しかられる理由を粘り強く、繰り返し教えるのが教育です。しかる前に一呼吸間をおいてしかるようにしてはどうか。

